

# 呉錦堂を語る会通信

NO.35 Oct. 2017

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34  
 橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」  
 Tel. 078-911-1671  
 編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員  
 発行日 2017.10.1



## 『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』

呉錦堂を語る時、楊寿彭編集『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』（1914年発行）と同氏編集『呉錦堂先生哀思録』（1926年発行）は避けて通れません。どちらも文語体で書かれた歴史的記録です。

この度、前者の現代日本語訳を試みました。ここでは、神戸華僑歴史博物館所蔵「陳徳仁コレクション」に含まれている複写資料を使用しました。ところで、当該資料は写りが悪く、そのまま写真画像が使えない部分は改めて入力し直しました。その関係で、原文の活字と違った字体になっている字があります。この点、おことわりしておきます。

まず、当頁に目録を載せました。全体（112頁）を概観願います。続いて、次頁、次々頁に「序」の原文と日本語訳を掲せました。また、号を改め、「壽言」の一つを取り上げる予定です。（編集委員 橋 雄三）

### 『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 目録

題名	關應鑾
題簽	王守善
題字	陸宗輿
同	孫鏘
呉錦堂先生肖像	楊壽彭
序	楊壽彭
壽言	蔣尊篋等
同	虞仁甫等
同	沈松培
同	王敬祥等
同	同文學校職員
同	華強學校職員
同	楊壽彭等
頌詞	親族總代表余劍帽
同	東京中國實業雜誌社代表李文權
同	横濱三江商・學界同人全體
同	横濱中國大同學校同人等
同	横濱中華學校學生代表
同	大阪僑阪同郷全體代表蔡際雲
同	神戸廣業公所
同	福建公所
同	三江公所
同	同文學校值理全體
同	同文學校校友會會員代表楊康衍
同	同文學校學生全體
同	華強學校同人等



同	神戸華商公會同人
同	（銀餅）李光泰馬聘三等
同	神戸華僑商業研究會代表楊壽彭
同	神戸中國慈善會總理楊海壽等
同	神戸商餘樂善會會長何世錫等
同	横濱華僑學校值理代表鮑次樓等
同	浙慈錦堂學校全體學生
壽詩	金堅燮
同	鄭瑞圖
同	柳淑之
同	樓良
同	童春
壽聯	陸公使 朱將軍 屈民政長
同	張財政長 蔣將軍 鄭孝胥
同	鐵良 同文學校職員 沈湛然
同	虞和德 葉瀚 胡允斌
同	陳士達 高學廣 杜炳卿
同	余東泉 劉杏村等
同	張正修方承烈 沈蕙畦
同	徐蕙生 徐禮蒞 包容等
同	胡感和等 樓良
壽歌	神戸華強學校學生全體
同	呉錦堂先生（率子啓藩孫伯琪）答辭



本号一〜三頁掲載の肖像及びカットは、全て、原本に挿入されていたものです。

## 『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 「序」 (日本語訳)

当頁、及び次頁に、楊寿彭の文章になる、『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 「序」の原文と現代日本語訳を掲載いたしました。編集委員にとって、難しい作業でしたが、狹間直樹先生のご指導を得て、掲載できるところまで内容を整えることができました。深く感謝いたします。(編集委員 橘 雄三)

序

昔孔子刪詩。以頌爲風雅之殿。禮稱晋獻文子成室。而張老

善頌善禱。古者太平德洽。凡堂廉之上。摺紳之家。功在萬民。

頌聲遂作。即一介之士。有裨於世。惠及羣庶者。亦靡不載諸

口碑。被之丹絃。相與謳思而紀祝之。語云。歌功頌德。盖有自

來矣。降及有漢。白麟、赤雁、芝房、寶鼎之歌。薦於郊廟。神雀、五

鳳、甘露、黃龍、之瑞。以爲年表。衆庶悅豫。福應尤盛。而司馬相

如。虞邱壽王。東方朔。王褒。枚皋諸人。因得於金馬。石渠。以文

章相門靡。雖曰窮極侈豔。誠以不如此。不足以鼓吹休明。宣

揚德化。風當時而勸來禳也。今我

大中華國。成爲民主。天下之責。匹夫與有。其有德前人之德。

功前人之功者。無不可以前人之所頌者頌之。



(3頁右上へ続く)

序

昔、孔子は当時伝わっていた多くの歌謡から三百五編を選んで「詩」を編集し、国風、小雅、大雅と載せ、最後に頌四十編をおきました。礼記には、言われています。晋の卿、献文子(趙武)の新居が落成したときのこと、張老の応答に君子は、「張子はよく祝い、趙子は良く答えた」と言いました。古代、太平の徳は、すべての殿堂の上、官職にあるものの家に行き渡り、功は万民にあり、音楽を奏で、舞を舞いその恩沢を神明に報告しました。たとえ一介の士でも世に役に立ち、恵みを民衆に及ぼす者なら、だれもがいたるところで褒め称え、朱線の楽器で奏でて、互いに思いを歌い、記憶にとどめました。ことわざに言います。功績や徳を褒め称えた歌を歌うことは、実は由来のあることであると。

時代が下り漢では、白麟、赤雁、芝房、寶鼎の瑞祥が現れ、その都度、歌われ、郊廟で奏されました。また、神雀、五鳳、甘露、黄龍の瑞兆は年号に採用されました。これゆえ、衆庶は悦び、福はまさに最も盛んとなりました。司馬相如(しばしやうじよ)、虞邱壽王(こきゆうじゅうおう)、東方朔(とうほうさく)、王褒(おうほう)、枚皋(ばいこう)など才智、俊異のものを寵用しました。宮廷内には、文学の士の出仕する金馬門や、おおくの図書を收藏する石渠閣が設けられ、彼らは文章を以て、互いに奢華を競いました。日々、奢侈の限りを尽くすといっても、まことにこのようにしないなら、立派な政治を鼓吹して徳化を宣揚し、当時を風化し来世を訓導するに足りません。

今、わが大中華国は大統領制の国となり、天下の責任は、国民の一人一人にあります。前人の徳を徳とし、前人の功を功とすることが有るからであります。前人を称揚する人でこれを称揚しない人はいません。

## 『浙慈 吳錦堂先生六旬榮壽録』 「序」 (日本語訳続き)

(2頁から続く)

吳錦堂先生。熱心公益。力行善舉。其爲國爲民。捐鉅資者。彙至數十萬金。誠所謂德前人之德。而功前人之功者乎。昔魏吳悉達。遇隣人孤貧窘困者。莫不解衣輟糧以相賑卹。鄉閭五百餘人。詣州稱頌焉。

先生其苗裔也。而賑卹之量過之。遠近賓朋。遂於今冬

先生六袞壽辰。踴々濟々。晉頌稱觴。祝序歌詞。輝映堂壁。良有以哉。壽彭忝承同人不棄。舉爲祝賀會總幹事。榮寵有加。既喜其中文藻之璀璨。又景仰

先生之功德及人。爰輯成冊。付之手民。其諸再聞風雅之遺音也夫。是爲序。

民國三年十一月二十五日

嶺南楊壽彭謹識



吳錦堂先生は熱心公益、力行善舉、国のため、国民のために寄付をし、その総額は数十万金に上ります。まさに、前人の徳を徳とし、前人の功を功とするものであります。昔、魏に吳悉達という人がいました。彼は、隣人に、貧窮している人がいると、いつも着ている衣を解き与え、自分の食べ物を与え救済しました。郷里の五百余人が州の役所に赴き、称賛しました。

先生はその子孫で、その救済の大きさは吳悉達に勝ります。遠近の賓客友人は踴躍濟濟と集まり、今冬の先生六十歳の誕生日を祝いました。祝言、祝詞をもって先生を称揚し、杯をあげ、広間の壁は照り輝きました。誠にその通りです。私壽彭、忝くも祝賀会の総幹事をおおせつかり、光栄にぞんじます。すでに、祝言、祝詞の文章の輝きを喜ぶとともに、また、先生の功德の人に及ぶことを敬慕するものを、ここに集めて一書とし、印刷の手筈を取りました。ふたたび、風雅の余韻を聞かれますように。これをもって序といたします。

民國三年十一月二十五日

嶺南楊壽彭謹識

## 編集委員後記

浅学菲才の私にとって、この度の『榮壽録』の現代日本語訳は、誠に勉強になりました。まず、『漢書』『礼記』など、中国の古典を典拠とする引用については、諸橋『大漢和辞典』、明治書院『新釈漢文大系』ほかの閲覧に県立図書館へ日参しました。今から思えば、これが私の消夏法だったような気がします。現在、「序」に次いで、「壽言」に取り組んでおります。

「神戸に灯をかかげた人—武藤山治と呉錦堂—」（黒部亨著『兵庫人国記』より）

神戸市在住であった作家、黒部亨(1929-2014)に『兵庫人国記』(1994年、神戸新聞総合出版センター発行)があります。「のじぎく文庫」の一冊になっていることもあって、地元ではよく読まれている本です。同著は36の節からなり、近世以降、郷土の先賢80人ほどを取り上げています。その一つの節が、「神戸に灯をかかげた人—武藤山治と呉錦堂—」です。「神戸に灯をかかげた人」、なんともうれしいネーミングです。以下、気になる点3カ所を抜粋引用しコメントを付しました。傍線は編集委員が加筆。(編集委員 橋雄三)

抜粋引用 1

神戸・舞子の浜の名物として市民に親しまれているものに「移情閣」がある。現在の孫中山記念館である。白砂青松の海岸にマッチしたこの八角堂は、海上からながめてもおもむきのある一点景となっている。このあたりは大正のころは明石まで浜つづきで、ときおりその波打ちぎわを馬に乗ってゆうゆうと散策する中国服の紳士がいた。神戸の華僑として成功した呉錦堂(中国浙江省出身)の晩年の姿である。

抜粋引用 2

やがてマツチ、綿花、穀類などをおもにあつかうようになった。これらの品は投機性に富んでいて利幅が大きかったから、みるみる財をなした。籠池通りの広大な邸宅に住み、二頭立ての馬車に乗る身分になっていた。そして明治三十七年に日本へ帰化したころには、もう華僑の第一人者として押しも押されぬ実業家へのしあがっていた。成功を妬んで批判する者もいた。ある雑誌で「錦堂は営利がいに目的がなく、徳義など棄にしたくもない」と酷評されたこともあった。だが、そんな中傷にもへこたれることなく、どの会社へも中国服で堂々と出入りした。

錦堂の家の隣に住んでいた武藤山治は、そのころの錦堂のことをつぎのようにのべている。(以下、武藤山治著『私の身の上話』「人の世話」を引用し記述)

抜粋引用 3

舞子の八角堂は錦堂の別荘として大正六年に建てられたものである。三階建てで八方に窓があり、その窓ごしにながめる景色のおもむきがそれぞれことなるところから移情閣と名づけられた。(中略)

この堂は主として客の接待用に利用され、中国の革命家・孫中山(孫文)の歓迎会が開かれたこともある。

抜粋引用 1 コメント

呉錦堂が馬に乗って、波打ちぎわを散策するというのは、なんとも魅力的な光景です。編集委員は、この光景の記述のある著書、四つを知っています。おそらく、次の順で、前者を典拠としているのではないかと推察いたします。

原出所は現在のところ不明

1 陳舜臣著『神戸というまち』一九六五年至誠堂新書  
陳舜臣著『神戸ものがたり』一九八一年平凡社

2 ここで取り上げた黒部亨著『兵庫人国記』

3 寧波市政協文史委編『呉錦堂研究』二〇〇五年出版

抜粋引用 2 コメント

抜粋引用 2では、「籠池通りの広大な邸宅」、「二頭立ての馬車」、「錦堂の家の隣に住んでいた武藤山治」、この三つが、いかにも、同時期、同地点でのできごとのように記述されていますが、事実は、かなり違っていたはずはです。

抜粋引用 3 コメント

同著には、大正二年三月十四日撮影の、前列中央に孫文と呉錦堂が並んだ、松海別荘前の集合写真が掲載されています。孫文歓迎会が移情閣で開かれたという事実はありません。



画像は編集委員作成